『風と共に去りぬ』作品論
ーメラニーの性格分析とアシュレーの心情ー

後　藤　世　津

『風と共に去りぬ』を見た中で、自分なりの解釈で、疑問に思ったことを分析してみることにした。登場人物は、どの人物もみな個性的で、おもしろいのだけれど、その中で、最も気になったメラニーについて、自分なりに分析してみたいと思った。

この物語で、非常に大きな役割をしているのに、目立たないような存在のしかたをしている。にもかかわらず、目立っているのはなぜだろうか。外見も弱々しいのに、強く見えるのは、どういった心持ちからきているのだろうか。

一般的に見ていくと、メラニーは、気持ちがとてもおだやかで、おおらかで、やさしく、つつましやかな、いかにもレディーの見本となるような女性である。たしかにそういう女性ではあるのだけれども、何事も冷静に考え行動できるということは、どこか、冷たくて、残酷な部分があるのではないだろうか。結局、メラニーとは、誰よりも非常に頭の回転や切り換えが早く、周りをすばやく察知でき、すべて許す心があるのではなく、すべてをうまくまるくまとめていく力のある人だということにたどりついた。メラニーはある意味では立派な大人の女性ではあるけれど、気持ちを押さえすぎて、がまんすることによって、なにか少し怖く見えてならなかった。スカーレットのように子供のまま大人になってしまった人のほうが、わかりやすいと思った。２人をたとえるなら、協調性のある人と単独行動をする、羊とライオンのような気がする。

アシュレーの心情については、分析にもちかいが、彼のあるゆることについての考え方についてである。結婚観にしても、あらゆることについて、彼という人間に、安定と安全性を求める。人とのもめごとがきらいで、協調性もあり、社会的にも紳士とみとめられている。

メラニーとアシュレーは考え方が似ている。メラニーはアシュレーにとっては母親のような存在で、メラニーにとってアシュレーは、兄のような存在であろう。

似ている２人が（少しずつちがうが）お互いを求めあう、その要因とは何であるかについて、考えてみたいと思った。

（指導教員　中村　敦志）